



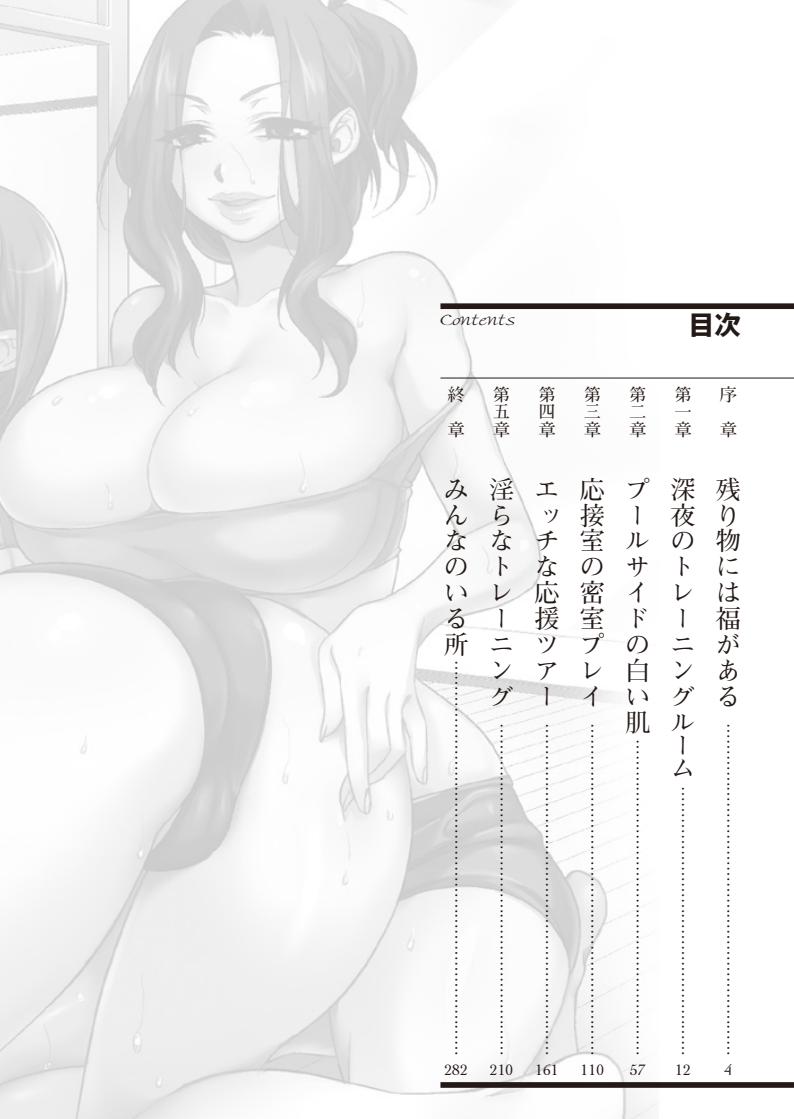
濃蜜エクササイズ

スポーツジムの快感レッスン

巨道空二

挿絵／阿川椋

立ち読み版



Contents

目次

序章	残り物には福がある……………	4
第一章	深夜のトレーニングルーム……………	12
第二章	プールサイドの白い肌……………	57
第三章	応接室の密室プレイ……………	110
第四章	エッチな応援ツアー……………	161
第五章	淫らなトレーニング……………	210
終章	みんなのいる所……………	282

登場人物

Characters

石田 忠志

(いしだ ただし)

大学生。運動が苦手な積極的ではなかったが、インストラクターの由香に惹かれてジムに通うようになる。

伊東 由香

(いとう ゆか)

インストラクターで、ジム所属のトライアスロン選手でもある優秀なアスリート。勉強熱心で、さっぱりとした性格の美女。

白石 恵

(しらishiめぐみ)

栗色のロングヘアが目を引き、忠志と同じ大学の後輩。体力づくりのためにジムのプールで水泳に励んでいる。

八坂 圭子

(やさか けいこ)

ジムを経営する会社グループの女性役員。由香の友人であり、彼女のスポーツ活動もサポートしている。未亡人。

「由香さんのあそこ、もう濡れてる……」

「そうよ。感じちゃってるもの。恵ちゃんだって、そうよね」

「あつ、あたしは、そんな恥ずかしいこと……ああつ、だ、だめですっ」

お尻をもじもじさせるのを引き留めるようにして、水着のクロッチに指をかけてずらしてしまふ。水着で隠されていたお尻には日焼け跡はまったくなくて、ゆで卵の白身みたいに滑らかだ。

胸元を水着で隠したまま、秘部は完全に無防備になってしまった恵は肩をすくめるようにして小さくなっている。もともと顔は赤くなっていたが、もう耳まで真っ赤になっちゃっている。

「かわいいよ、恵ちゃん……」

可憐な印象を裏切らない、清楚ともいえる秘部が若者の前に明らかになっていた。肉付きの薄い花卉は色づきも薄く、ピンク色から肉色までの美しい色の変化を楽しめる。恥丘は申し訳程度の草むらに飾られているだけで、まだ生えそろっていない印象すらある。少女のような、無垢さを感じさせる秘花だった。

「み、見られちゃってる。は、恥ずかしいです……」

もじもじと太腿をこすりあわせながらの、そのぎこちなさが可愛く思える。由香と

は何もかもが対照的な気がした。同じなのは、ぴったりと閉じあわされた肉溝がしつとりと蜜を含んでいることだった。

「大丈夫。綺麗だよ、恵ちゃん。触るよ」

「ひゃっ、ひゃうっ……あつ、はふっ……い、いきなり……」

花卉の合わせめに指をそわせて、秘裂をたどりながら花卉をくすぐってやる。柔らかくて温かい女性の肉体の中心が、初めて男の手を受け入れていた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ、恵ちゃん。忠志クンを信じてあげて、ね？」

「は、はい……で、でもちよつと怖くて……ああんっ」

安心させてやろうと後輩の肌を撫でてやる由香だったが、敏感すぎる処女の身体はそれさえも快感に変換してしまいうらしく、細い身体は跳ね上がるように反応し、青年を驚かせた。

「敏感なんだね。大丈夫。優しくするから……」

「あ、あたしばかりは、だめですう……ひんっ……ちゅっ、ちゅばあ……っ」

両手でペニスを包むようにしながら、先端を口に含み、必死になって愛撫を続けようとする。もちろん、そんな彼女の初フェラチオも気持ちはいいのだが、それ以上に恵の敏感さは新鮮で、彼女の反応すべてを引き出してやりたくなくなってしまふ。

「せ、先輩に気持ちよくなって、くふうっ……欲しいのにいつ……あっああんっ」

すでに潤っている肉溝をなぞって指を往復させるだけで豊かな反応がわき出てくる。かすかに指をめりこませるようにしてやると、それだけで切羽詰ったようなせつなげなあえぎ声が耳をくすぐる。この声だけでも男の欲望は燃えあがってしまう。

「ひゃあっ、あっ……お、お口でできなくなっちゃう……」

激しい快感に秘肉が収縮するのが可愛い。力が入らなくなって忠志の身体に突っ伏してしまうのだが、そうすれば胸元の膨らみの感触も加わってさらに気持ちよく、欲棒を大きく反応させてしまう。可愛い口の中で肉棒がぐいぐいと膨張し、こぼれ出てしまいそうだ。

「くすっ。恵ちゃん、可愛いわね。しっかりとイカせてあげてね。私も……」

そういう由香は男の急所中の急所をもてあそびながら内腿や睾丸、ペニスの根本を舐めしゃぶり、吸いついてくる。自分ではできない愛撫の快感に、ペニスとトロトロと粘液を分泌しながら小刻みな痙攣を繰り返していた。

「そ、そんなにされたら、持たないよ」

巧みすぎる愛撫に焦りすら感じながら、しつとりと蜜を含む肉花の中心に手を伸ばす。そこはすでに十分にほぐれ、すつぽりと中指を受け入れてくれる。反応しすぎて

奥に指を差し込めない恵とは大違いだ。内部に潜り込ませた指を軽く曲げてかきまわすと、かすかに泡立った愛液が音を立て、淫らな香りを振りまいた。

「ふああっ、ほ、本当に上手になっちゃって……私も気持ちよくなっちゃうっ」
「で、でも、ぼくも限界だよっ。もう我慢できないよっ」

左右に美女のお尻を抱え込み、思うさまねぶる贅沢を味わう男の股間は今にも暴発しそうなほどに張りつめ、小さな収縮とともに粘液をにじませる。ぎこちない恵の愛撫の中で、すでに破裂しそうだった。

「いいじゃない。恵ちゃんだって、もう限界みたいよ。気持ちよくしてあげないと」
会陰部までもペロペロと舐め、細指でくすぐってくる由香のテクニクに下半身全体がとろけてしまいそうだ。だいたい、由香の豊かな胸や二の腕だって十二分に気持ちよいのだ。快感に包囲されているような感覚だった。

「どくん、どくん、どくん——」。

心臓が一度打つごとに快感の毒が全身に回り、ますます欲望と肉悦に冒されていくような気がする。先端からジクジクと欲望の粘液をにじませるペニスは激しい興奮に敏感になっていて、ちよつとした刺激にも大きく反り返って反応した。

「ご、ごめん。恵ちゃんっ。ぼく、もたないっ」

「ら、らいらいようぶ、れふっ……んんふっ、んっんぐっ……」

ぎこちなくはあつても懸命な恵の先端への愛撫。何も知らなかった女の子に淫らな愛撫を教えていると思うと、それだけでゾクゾクする。ねっとり巧みな根本から陰囊周辺への由香の愛撫。股間を中心に下半身がドロドロに溶け、ペニスを中心に渦を巻いている。

そして、快感をさらに押し上げるのは、これ見よがしに突き出された二人のお尻だ。隠されるべき小さなすばまりまでもはつきりわかる体位で、二人の秘部をいじり放題なのだ。視覚的にも触覚的にも、さらには嗅覚においても極楽だ。

くちゅっ、くちゅ、じゅぽっ——。

淫らな音とともに二つの秘花が痙攣する。恵は初めてだけあつて小さくきつい感じだが、先端が入るだけでも十分に感じてくれていているようだ。

「い、いくよ、もう——っ」

「は、はひっ。いふれも、いい、れふうっ……あつ、あひっ、ふあああつ」

力が入らない中、必死に顔をあげて忠志のモノを含み、愛撫を続ける恵の身体に緊張が走った。秘花の花弁の狭間の小さな花芯を男の指が捉え、すりあげた瞬間、少女のような細い身体は瞬間的に絶頂に達していた。

「くううつ、でっ、出るよっ」

無意識に唇や舌にも力が入ったらしい。女学生の口腔内で若い雄の器官もまた絶頂に達し、勢いよく樹液を吹き上げる。トレーニングで体力が充実しているせいか二度の射精にもまったく衰えはない。欲望と快楽の液体が白濁したゼリーのように濃厚なままに噴出し、恵の可憐な唇の中に叩きつけられる。

ドクンッ、ドピユッ、ドクッ、ドクドクッ！ ドピユドピユドピユッ——！
「んくっ、んっ、んふうっ……んくっ、んあっ、んぐうつ、くっ、ううつ」

言葉も発することができないまま、大量にぶちまけられるスペルマに喉をつまらせる細い身体が、同時に訪れた絶頂の中でうねり、震えわななく。青年の手は大量に分泌された愛液にべつとり濡れ、恥ずかしくも淫らかな香りがたちのぼる中、女たちは恍惚として欲望と肉悦の沸騰に身をまかせていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……だ、大丈夫？ 恵ちゃん……」

「そ、そうよ。無理して飲むことはないんだからね」

コクコクとうなずいてみせながらも、恵は吐き出したりしなかった。鼻を鳴らしながらも必死に精液の噴出を受け止め、なんとか飲み下している。その間も、必死に龟头を舐めしゃぶり、吸いついてくるので絶頂に達したあとの恍惚感はずつなくも狂お

しい快感にとつて変わられていた。

「くうっ、今は……敏感だから、そんなにしなくてもいいからっ」
青年が秘裂の中で指を動かすまで、恵の必死な愛撫は続いたのだった。

「ふううっ。びっくりしたよ。気持ちよかつたけど……」

「え、えへへっ。あたし、先輩を気持ちよくできたんですね。嬉しいです」

荒く、熱っぽい呼吸。肌の奥にはまだ快感の粒が潜んでいて、わずかな刺激でも肉悦の炎が目覚めてしまう、そんな状態。忠志だけではなく、女二人も目元を染め、せつなげな吐息をつく。二人の瞳は潤んで、ひどく色っぽいのだ。

「初めてなのに、精液飲んでくれるなんて、愛よねー。恵ちゃん、いい子だわ」

「あうっ。せ、先輩のを無駄にしたくなくて……あううっ、あっ、ああんっ」

由香がいいこいこするようには恵の髪を撫でただけで恥ずかしいほどに淫らな声がこぼれる。文字通り快感のスイッチが入ってしまった状態だ。顔を真っ赤にして肩が震わせる恵は、年齢より幼く見え、背筋がゾクリとした。

「くすっ。これだけ敏感になつてると、初めてでもイケちゃうかもね、恵ちゃん」

「ひっ、ひんっ。は、恥ずかしいですっ。い、今だつてすごく気持ちよくって」

恥ずかしいと言いつつも、トロトロとこぼれ続ける淫蜜はとぎれる様子はない。

「恵ちゃんはまだ処女なんだよね。ぼくと……する？」

「は、はい。あたし、先輩に、してほしいです」

くぎるように言う恵の瞳に迷いはなかった。快感に潤み、口元はかすかに開いていたらけれど訴えかけるような視線に曇りはない。

「くすつ。恵ちゃん、可愛いつ。忠志クン、気持ちよくしてあげないとダメよっ」

「そ、そりゃあそのつもりだけど……」

「そうね。恵ちゃんの初めて、台無しになんかできないもの」

くすりと笑った由香が恵の水着の上に手をかけた。肩ひもをずらされる娘が小さな悲鳴をあげるが、抵抗はしない。こうして、若者の目の前には四つの乳房が並んだのだった。

「綺麗な形ね。うらやましくなっちゃう」

「ゆ、由香さんのほうが綺麗です。比べられちゃうと、恥ずかしい……」

十分に大きな由香の乳房は美しい半球を描いていて、恵のそれは曲率は明らかに小さく、ポリウムも控えめだ。少女じみた双丘は実に美しいラインで男の目を引きつけるが、乳房の頂点の突起の形がいびつになっている。陥没乳首だ。

「二人とも、綺麗だよ。すごく引き込まれる。恵ちゃんのおっぱい、可愛いよ」

「あつ……」「うふふつ。かわいがってね、忠志くん」

柔らかいのはどちらも同じだが、弾力が強いのは由香だ。やはり鍛えられた身体だけあって、引き締まっているのだろう。だからといって、恵の肌の張りど滑らかさは年齢的なことを考えても素晴らしいもので、けて由香に引けをとるものではない。

「あ……先輩……あ、あたしのおっぱい、その……」

「大丈夫。可愛いよ。すごく綺麗だ」

ちようど手に収まる大きさの恵の乳房は感度も高く声を抑えられないようだ。撫でまわし、軽く指をくい込ませて愛撫するだけで反転して沈み込んでいた乳首が見える。見るうちに大きくなり、顔を出してくるのが可愛い。

「ひつ……そ、そんなに触られたら……感じすぎちゃいますっ」

顔を出した乳首に顔を近づけ、キスしてやると一瞬だけ細い身体が硬直した。呼吸まで止まったようだ。乳首がさらに突起し、普通の形になっている。

「可愛いよね、恵ちゃんのおっぱい……私にも触らせて？」

「あつ、ああつ……ふつ、二人はだめですう……あつ、ああんっ」

すっかり勃起してしまった乳首を左右から先輩たちに吸われながらほっそりした身

体が身悶えする。どこにも置き場のない手は、口元で声を抑えようとしている。

一度突起してしまった乳首はもう普通の乳首となら変わるころはないが、自分たちの愛撫で感じてくれた証拠だと思えば可愛さも募る。可愛いあえぎ声が耳をくすぐるのが心地よくて、愛撫にも熱が入ってしまう。

「両方から吸われたら、おっぱい変になっちゃいますうつ、あううつ」

柔らかすぎないくらい柔らかいのに、しつとりとした弾力で押し返してくる乳房の感触と舌で転がす乳首の絶妙な固さがいい。彼女の身体にどうにもならない熱がこもり、全身がとろけてしまいそうになるまで吸っていたかった。

「先輩い……二人にされたら、おかしくなっちゃう……ひやううつ」

「そうね。彼女の初めて、しつかりと奪ってあげないといけないわ、忠志くん」

力の入らないらしい恵の身体を支えてやりながら由香が笑う。

「忠志くんは、横になっていいわ。私たちが、してあげるから」

若い雄の器官はすでに二度放出しているというのに、萎えることを知らない。ビクビクと興奮に震えながら天を衝かんばかりにそそり立っている。

「せ、先輩の大きいです。こんなの……無理かも……恥ずかしいし……」

「大丈夫。女の子が上なら、自分でコントロールできるんだから」

さすがに怯えを見せる後輩を支えながら、男の身体をまたがせる。女性上位の体位は、同時に男からは実に眺めのいい体位でもある。明るい休憩室では、彼女の秘部がとろけている様子もはつきり見え、内腿に蜜が伝い落ちたあともよくわかる。

「さ、そつと腰を下ろして。ゆつくりね。いい子よ、恵ちゃん……」

「ちよつと怖いです……あつ、あうつ。先輩、お願いします……」

先端が触れた瞬間細い身体の動きが止まった。今度はおそるおそる、さらにゆつくりと腰を下ろしてくる。由香がペニスに手を添えて位置を微調整してくれているのも気持ちよくて、先端からはにじみ出したカウパー氏腺液がしたたっていた。

ちゅぷつ、にゅるつ、にゅふにゅふにゅふ——っ！

「はうつ、はいつて、入ってきますつ……お、大きいつ、くふつ、あつ、ああつ」

肉の花弁を割り裂いて、肉槍が女体の中心を貫いていく。処女地を蹂躪する征服感とほっそりとした彼女への気遣いが狭隘きょうあいな生娘の肉洞を押し入る快楽とிரிまじる。

かすかな抵抗は処女の証なのか、それとも肉ひだの激しい締めつけなのか忠志にはわからない。わかるのは、彼女の中がきついということ。小柄な恵だけあって、内部には余裕がないようだ。痛いほどの締めつけがさらに快感を生む。

「か、身体の中、いっぱいになっちゃいます……これが、先輩の……」

「そうよ。忠志クンに、恵ちゃんの中をいっぱいにしてもらうの」

恵の手を握ってやりながら、耳元で年上の女性がささやく。それだけでも感じてしまう敏感な身体がビクリと震えた。

「大丈夫。これだけ感じやすくして、ほぐれてきているんだもの。怖がらないで」

「は、はい。がんばります……ちよつと……痛いから、ゆつくり……」

忠志からは二人の結合部までもがはつきり見える。陰毛も薄くまばらな可憐な秘花に自分の凶悪なモノが突き刺さっている様子はなんだか背德的で、それだけで背筋がゾクゾクする眺めだった。ましてや、細い身体にはもう一人の魅惑的な美女がからみついているのだ。興奮しないわけがない。

「くっ……。ぼ、ぼくは気持ちいいけど、無理しないでいいからね」

「ありがとうございます。先輩……あ、あたしは大丈夫ですから……ん……」

男の言葉に安心したのか、かすかに彼女の中がゆるんだようだ。ミチミチと痛いほどだった締めつけではなくなっていく。もともと濡れていた彼女の中がさらにしつとりと潤って、ほぐれていくのがわかる。

「痛かったら、無理にしなくてもいいから」

「まだちよつと痛いけど……でも、気持ちいいのもあるんです。ヘンな感じ……」

真つ赤な顔のまま、ゆっくりと腰を揺らしていく恵。細い腰がうねり、そのたびに少しずつペニスが女性器の奥に飲み込まれていく。その緊密な摩擦感と潤滑感が亀頭粘膜をこすりあげ、快感感が波となって広がっていく。

「恵ちゃん、けなげね。私も応援してあげる」

「ひゃんっ……ゆ、由香さん、そんなことされたら、あたし……はううっ」

彼女の腰に手を添えたまま、もう片方の手が彼女の胸を這いまわっている。指がまるで蜘蛛の足のように巧みに動き、敏感すぎる恵の肌から快楽のポイントを探っていく。

「いっぱいいっぱい感じて、気持ちよくなつてね」

乳首をつまみあげられた瞬間、きゅんっ、と後輩の女の子の中が収縮した。小さな悲鳴とともに続けざまの締めつけが発生し、たっぷりの蜜にまぶされたペニスはそのたびにじわじわと内部にくい込んでいく。

「はあっ、はあっ……は、はいつて、はいつてきます……あたしの中に……」

焦げ茶色の瞳が潤んで、涙がこぼれそうだ。快感と痛みが彼女の中でせめぎあっているのだろう。それを耐えながらも男のモノを受け入れてくれるほっそりとした女の子への愛しさが募る。



慣れた手つきでファスナーを下ろし、男根を露出させる圭子の目の前で、雄々しく立ちあがったペニスは先端をヌラヌラと光らせていた。

「こんなに熱くなって、わたしを求めてくれてくれるのね。嬉しい……」

圭子が立ちあがると、タイトスカートのホックをはずし、引き下ろしていく。豊かな胸にふさわしくしつかりと盛りあがった尻肉と、なだらかな下腹部が露わになる。ガーターベルトがストッキングを吊り上げている様子がなんだかいやらしい。

「す、すごくエッチな格好なんですネ……ぼく、初めて見ました」

「女であることを忘れてたくないから、ね。わたしに実感させて。女であることを」

シヨーツはストッキングとともに黒。引き下ろそうとした圭子が動きを止め、目配せした。かすかに震える手を伸ばし、シヨーツの脇に指をかけ、そつと下ろしていく。「恥ずかしいけど、男性の手を感じるのって、気持ちいいの……」

下腹部の肌もミルクを流したように白い。彼女の太腿の弾力を楽しみながら小さな布切れを下ろしていくのだが、想像していた眺めは現れない。恥丘がなだらかに盛りあがり、下肢の付け根の三角地帯に達しようとするのに、真っ白な肌はそのまま。草むらに覆われるべき小さな丘は、まっさらの更地であって、秘密の小川もむき出しのまま。予想もしなかった光景に、思わず息を吞んでしまった。

「こ、これって……その……パイパン、ですか？」

「ううん。わたし、ヨーロッパから帰ったばかりだから。向こうでは剃っているの」
いかにも大人の有能な女性なのに、そこにはまるで毛がない。それは不思議な光景だった。少女のような秘裂が一本くつきりと刻まれ、陰核包皮がぼつんと浮き上がっているのがいやらしい。

「ヨーロッパのほうだと、みんな剃っているし、お医者さんに剃られちゃったの」

一本ずつ脚を抜いていく際に、股間の奥で花卉が覗いているのに喉が乾くのを感じた。じらすように首をかき上げて微笑んでみせる唇の赤さが欲情を刺激する。ふつくと盛りあがる土手は綺麗に手入れされ、草むらの気配などまったくなく、小川へとくぼんでいく形状がくつきりと照明の下に浮き上がっていた。

「近くで見ても、いいですか？」

「もちろん。見るだけじゃなくて、触ってもいいのよ」

応接室の柔らかい照明の中に立つ圭子は、やはり大人の女性だった。堂々と姿勢よく立ったまま、腰を落とす若者を見下ろしている。かすかに呼吸が荒く、目元がほの赤く染まっているのが艶っぽい。

（常務って、会社のナンバースリーだったっけ。そんな人と……）

しかも、落ち着いた調度の応接室だ。オーナー役員の女性に応接室で誘惑される。どこの世界の話なんだと頭のどこかがささやいているが、目は女体から離れない。

肉感的なボディは胸のポリウムが特に目を引くが、たるみのない見事な肢体は彼女の気概を感じさせる。全身のラインはたゆまぬエクササイズに支えられているのだろう。下から見あげれば乳房のポリウムが強調され息苦しくなる。

「八坂常務、すごく綺麗です」

「ありがたい。でも、やっぱり恥ずかしいから、あまりじらさないでね」

間近で見ても、やはりまるで毛のない恥丘は衝撃だった。豊満な身体の中で、あるべき毛を刈り取られた様子は女兒の幼い肉溝を思わせる。

大理石のように滑らかな太腿だって、黒いストッキングがガーターベルトで吊られていて、いかにも大人の色気といった風情なのに、そこにはあるべきものがない。ストッキングごしに脚に触れると、男の意思をくみとった女は脚を開いてくれた。

「視線がすごいわ。そんなに見られたら感じちゃう」

「こんなにエッチなんですわ。すごいな。ドキドキします」

恥丘に刻まれた肉溝に陰核包皮が顔を出している。すつきりとした肌の中に、いきなり淫らなモノが埋まっていた。思わず指で触れていくと、ふっくらとした肌がかす

かに震え、めくれた肉ひだの内側に淫らな肉色が顔を出す。

「あ……」

花卉の発達具合は由香と同等かそれより少し上か。色づきも濃い目で、白くぬめやかな肌から淫らな肉の色合いと、さらに濃く沈んでいく色のグラデーションが男の欲望をさらに刺激する。花卉に触れるとそこはすでに潤っていて、トロリとこぼれ出た蜜が糸を引き、かすかに光を反射した。

「もう濡れているんですね。すぐくエッチな眺めです、常務」

息を呑むほどの淫臭がたちのぼる。甘い女性の肌の香りに淫蜜の香りが重なり、目眩を起こしそうなほどに誘惑的な香りになっていた。

「こ、こんなに見られていたら、感じちゃうわよ。それに、石田君の……」

「ぼくの、なんですか？」

花卉のあわせめに指をあてていじつてやるとピチャピチャと小さな水音が耳をくすぐった。ビクンと腰をよじると、蜜がたつぷりとにじみ出て指先を濡らしていく。

「石田君の匂い、エッチなの。すぐく感じちゃう」

「ぼくの匂いですか？ 体臭？」

見る見るうちに指が潤い、滑りがよくなっていく。肉溝から花卉の間までを指を滑

らせながら撫でてやると、柔らかな肉ひだに指が埋まる感触が心地よい。ピタピタと柔肉を叩くようにして指を動かすと淫らな水音が響き、女体が羞恥に緊張した。

「運動したあとの匂いがセクシーなの……んんっ、きつと、興奮したときも」

考えてみれば、由香が誘ってきたのもすべて作業や運動のあとのことだ。体臭というのも、案外いろいろあるのかもしれない。実際、忠志は女性の体臭も愛液の淫らな香りも好きだし、むしろ積極的に味わいたいくらいだ。女性が男性の体臭に興奮するというのもありえるかもしれない。

「ぼくにとつては、今の常務の香りのほうがよっぽどいい香りだけど」

わざとらしくクンクンと鼻を動かすと、圭子が頭を押さえつけてきた。

「ちよ、ちよつと、恥ずかしいからだめえつ。な、何をするのよつ」

脚を閉じようとするのを、その間に身体を割り込ませるようにして顔を近づけていく。肉溝に浮かぶ陰核包皮に鼻をこすりつけるようにして顔を彼女の下腹部に押しつけていくと女体の動きが止まり、緊張した。

「すぐいい香りがします。八坂常務のここにいっぱいキスしたいな」

濃厚に香り立つ女の匂いを胸いっぱい吸い込みながら、彼女の股間にむしゃぶりつくと、小さな悲鳴が連続的に応接室の壁に吸い込まれていった。

「あつ、くふつ、い、いきなりこんな……つ、あつ、あぐうつ」

舌を思いきり伸ばし、肉溝に潜り込ませていく。鼻で花芯をグリグリともみほぐすようにしながら、唇で花弁をついばみ、音を立てて蜜をすすりあげる。すでに興奮し、潤っている女体は秘花を震わせながらあえぎ悶えるしかない。

「それにしても、ストッキングって、手触りいいですね。気持ちいいですよ」
「ひやううつ、そ、そんなにされたらっ」

手触りが心地よいのは男ばかりではないらしい。圭子の嬌声が高くなり、腰がガクガクと震える。膣口が収縮し、蜜がこぼれ落ちるのがわかるほどだ。花弁はすでにじつとりと濡れ、ヌラヌラとぬめ光っていた。

「すごいですね、もうビショビショですよ」
「そ、それは石田君が激しくするから……あつ、ああんっ」

指を一本、軽く沈めるだけでクイクイと膣内粘膜が締めつけ、甘く震えるうめきが朱唇からこぼれる。この成熟した見事な女体を感じさせているという征服感に心が高揚し、股間のモノがぐいぐいと頭を持ちあげていく感覚があった。

「ああつ、ゆ、指がいいのっ。もつと深く、もつと激しくうつ」
ズブズブと沈んでいく中指をざわめく肉壁が包み込み、わななく粘膜がからみつく。

手が愛液で濡れ、熱をおびた秘肉に触れていく。ヒクヒクとうごめく肉ひだは柔らかく、どこまでも自分を受け入れてくれそうだ。

「ここ、敏感なんですよね。口でしてあげたら、どうなるのかな」

びくんと反応した女体が腰を引こうとするのを膣奥を押しさえてつなぎとめる。陰核包皮に軽くキスをするだけで女体に怯えにも似た緊張が走った。柔らかく薄い肉のフールドをかぶっていた小さな突起を舌でむき出しにし、唇と舌で包囲しながら舐めてやると女体が痙攣し、悲鳴にも似た嬌声が小刻みに震える。

「はううっ、あつ、あああつ、そ、そこはあつ……うぐっ、んんっ」

（すごい反応だな。もうイッチちゃいそうなくらい感じてる）

挿入した指で熱い牝肉をかきまわしながら、敏感な肉突起を思うままなめしやぶる。勢いにまかせ、舌の筋肉の許すかぎりの力と早さで往復させ、ガクガクと震える女体から蜜と悲鳴を引き出していく。

「こ、こんなにされたらあつ……くうっ、き、気持ちよすぎるのっ」

身体をくねらせるたびに豊かすぎる乳房がゆさゆさと揺れる。むっちりとした身体の中でしっかりと締まっている腰に手を添えながら、顔を圭子の秘処に押しつけ、敏感な部分をさらに舐めまわると大量の愛液が口元を濡らしていく。

「あつ、ああつ……イッチャうかも……つ、こ、こんなにいっ」

粘膜の痙攣はすでに小刻みになり、尽きることのない淫蜜が潤滑していく。膣奥の締めつけを楽しみながら、からみつく肉ひだを力を込めてかきまわす。泡立ち、こねまわされる粘膜が快感にとろけ、女体を熱く火照らせていた。

ちゅぱつ、ちゅくつ、じゅぷりっ——。

淫らな水音に秘部をくじられる発泡音がまじり、女の羞恥と快感をいやでも高めていくのがよくわかる。肉壺をとろかされ、クリトリスをしゃぶられながら官能は高ぶり、引き返せない一線を越えてしまっている。

「あつ、ああつ、イクツ、イッチャうつ、んくつ、あああああつ」

ガクガクと震える太腿が男の身体を挟み込み、バランスを失いそうな身体をなんとか支えようとする。すべやかな太腿の柔らかさと弾力を味わいながら、収縮する膣口を舌先で突きほぐし、こぼれる愛蜜をすすりあげる。

「はおおつ、イ、イつてるときまでえつ……くふつ、んつ、んああ——っ」

快楽の頂点に達して過敏になった媚粘膜をさらに吸い、舐め、かきまわすときぐもつた甘い小さな悲鳴が女の喉を震わせる。本来ならば雲の上の存在の取締役が、年上の大人の女性が身体を抱きしめるようにしながら悶え、うねり、反り返るのを下から

見あげると征服感と達成感が膨れ上がる。

「はあっ、はあっ、はあっ……い、意外と慣れて、いるのね」

両足から力を抜き、忠志を解放した圭子は倒れ込むようにしてソファに沈み込んだ。それだけの動作で胸元のたつぷりとしたポリウムが揺れる様子がたまらない。自分が巨乳好きだとは思っていなかったが、その傾向は十分にあるようだった。

「今度は、わたしからしてあげたいけど、いいかしら？」

「あ、はい。嬉しいです」

圭子は夫を亡くしたといっていたから、未亡人だ。どこか誘惑的な、男心をくすぐる言葉に胸がドキドキする。人妻のテクニクに期待してしまう。

「でも、参加したくてうずうずしている人がいるみたいね。入ってらっしゃい」

ギクリ、と後ろを振り向くと、かすかな音を立てて応接室の扉が開いていく。そこには、いつものトレーニングウェア姿の由香がぼおっとした表情で立っていた。潤んだ瞳は、すでにスポーツ選手でも仕事仲間でもなく、一人の女の目だった。

「け、圭子さん、抜け駆けです。二人で一緒になって、言っただけなのに……」

「くすっ。ごめんなさい。味見だけよ。味見だけ。一緒にしましょう」

女性インストラクターに怒りや嫉妬がなさそうなのにホッとすると同時に、面倒な

ことになった予感に背中が冷たくなった。

「ごめんね、忠志くん。内緒にしておいて驚かそうと思ったのだけれど」

「わたしが我慢できなくなっちゃったの。ごめんなさいね、石田君……」

そう言いながら二人の女性が並ぶと、背筋がゾクリとするような色気が匂い立った。引き締まった身体のスポーツウーマンと、豊かな姿態の女経営者はそれぞれの個性で男の欲望を強烈に刺激していた。

ウエアを脱ぎ捨てた由香はソックスとシューズだけ。一方の圭子はガーターストッキングに口ウヒール。身にまとう衣装もひどく対照的だった。二人とも半裸というには全裸に近すぎ、全裸というには残った衣装がいやらしすぎる。

女性スタッフの肌は健康そうな小麦色に焼けているけれど、焼き残した肌とのコントラストがいやらしく、下腹部の陰りが大人の女性であることを主張している。一方の女性経営者は異国の習慣にあわせ、成熟した女性の証である繊毛を綺麗に剃り上げてしまっている。あまりに対照的だった。

「忠志くんは、どちらが好き？ 私のほうが引き締まっているでしょう？」

「あら、わたしの身体、好きでしょう？ 柔らかくて、おっぱいも大きいのよ」

由香のほうが背は高いけれど、胸やお尻などは圭子のほうがボリュームがある。そ

の一方で、引き締まり、健康的なイメージの由香と、どこまでも色つぼく、淫らですらある豊満な圭子の対比は鮮やかだった。甲乙つけがたいと思う。

「くすつ。石田君のが、ヒクヒクしてるわね。もう、出したいんだ？」

「あれだけしていい、まだイッてないんだものね。イカせてあげる……」

青年がどうしていいかわからないまま、二人がカーペットにひざまずいた。上目遣いで見あげてくる瞳がちよつといたずらっぽくて、ドキリとしてしまった。お互いに男の気持ち争うようなことを言いながらも、やけに息が合っている。

「胸であげるね。二人にしてもらえるなんて、贅沢よ、忠志クン」

たぶん、とそれぞれの胸が揺れる。ボリユームのせいか、揺れの周期が違うようだ。より弾力があり、密度を感じさせる由香の乳房のほうが揺れが早い。

「そうね。わたしの胸で、思いきり気持ちよくなってちょうだいね」

一方、圭子の胸は大きいけれど芯を感じさせない柔らかさで、ゆつたりとした揺れ具合だ。こんなところにさえも個性はあるのだった。乳首や乳輪は圭子のほうが大きく、由香のほうは乳房全体が綺麗なお椀型を描いているのに対し、圭子はお饅頭型といえるだろう。それぞれ見応えのある女らしい隆起だった。

たぶん――。

まるでプリンのように柔らかく揺れた柔肌が、亀頭粘膜に触れた。左右から迫ってくる巨乳と爆乳の圧倒的なボリュームに思わず息を呑む。四つの乳房が急角度にそそり立つペニスを包囲し、ビクンと反応して硬度を増していく肉棒はたっぷりの弾力に包み込まれている。密着感に痺れるような快感が背筋を駆けのぼった。

「やっぱり、圭子さんのおっぱい、すごいわよねえ。柔らかくて私まで気持ちいい」
「由香ちゃんの胸は弾力がすごいよね。ねえ、石田君はどちらが好き？」

しかも、二人ともただでさえボリュームある乳房に左右から手を添え、圧力を加えてきている。ビクビクと反応する欲棒の先端からはダラダラと粘液がにじみ、四つの乳房の間にヌラヌラと濡れ光る谷間を作っていく。

「ど、どちらが好きとか言われても……気持ちよすぎて判断できません」

前後左右から量感たっぷりの乳房が波となり押し寄せてくる。巧みにコントロールされた重量感ある肉の揺れがペニスを包み込み、叩き、押しもんでくる。それが二人の巧みなコントロールで快感の波となって押し寄せてくる。

にゅぷつ、ぬるぬるつ、じゅぷつ——。

亀頭の鈴口からにじむはしから柔らかく滑らかな肌にこすられ、粘液がまぶされていく。潤滑油となったカウパー氏腺液がいやらしく光を反射し、それだけでも喉が鳴

るほどの淫らな光景だった。

「うふふっ。よだれでトロトロね。ヒクヒクしているわよ、忠志クン」

「うっとりした顔しちゃって。まだまだこれからのにね。石田君ったら、可愛い」

営業時間中は誰からも尊敬と憧れの視線を向けられる女性運動選手。もう一人は女経営者で、企業戦略にも関わりながら身体を鍛えることを忘れない女傑のはずなのに、こんなにいやらしくていいのだろうか。

「さあ、追い込んじゃうわよ、この由香さんのテクニクでイカせてあげるんだから」
「わたしの胸でたっぷり感じさせてあげる。いっぱい出していいから、ね？」

二人の動きが激しくなっていく。中腰になって、身体をうねらせながらの複雑な動きに乳房がペニスをこすりあげ、それだけでも身震いたくらいだ。前後、左右、上下。二人の美女の淫らなダンスの中心で、破裂してしまいそうなほどに勃起したペニスは熱い血流に脈動し、痛いほどにそびえ立っていた。

ぬるっ、にゅぷにゅぷっ、にゅるりっ——。

「こんなに脈打って。せつないのね、石田君。あんんっ、わたしまで感じちゃう」

「ち、乳首がこすれてるうっ。圭子さんのおっぱい、柔らかすぎるわよお……んんっ」
普段あれほど強気そうな女たち。風を切って歩くのがよく似合う活動的で有能な女

性たちが、自分の足下にひざまずき奉仕してくれている。自分という人間が強く、大きくなったような充足感がこみあげてくる。

「すぐく熱くて、ヒクヒクしてる。ああ、これ、欲しい……」

「んふっ、圭子さんなら……よりどりみどりじゃないの？ ああつ、こんなに固いつ」
世界を股にかけるビジネスウーマンなら男に不自由はしなそうだとは思うが、圭子の返事は意外なものだった。

「わ、わたしはそんな安い女じゃないわ。こんなこと、普段はしないのよ？」

そう言いながらも目を潤ませ、頬を赤く染めながら熱心に愛撫してくれる様子は淫らそのもので、大人の女のテクニックを惜しげもなく披露してくれる。

ウエーブのかかった髪を振り乱しながらしつとりと柔らかい肌を思いきり押しつけ、こすりつけてくる。どこまでも柔らかくて温かい乳房に挟まれるだけで多幸福感を感じ、撫でまわされ、すりたてられると射精感がこみあげてくる。

「ううっ、ぼ、ぼくはもう我慢できないよっ。……も、もう出るっ」

「忠志くん、気持ちいい？ いっぱい出しちゃっていいからっ」

「そうよ。石田君、もつともつと気持ちよくなっしてほしいの……ほら……んちゅっ」
圧倒的なポリュームの乳房に挟まれながら亀頭が顔を出したのに、圭子が吸いつい

た。エロ本やアダルトビデオでしか見たことのないパイズリフェラに目を丸くしたのも束の間、ふつくらとした唇に包まれながら両手で圧力をかけられた乳房の圧迫と摩擦に身体の芯をこすりあげられたような快感が背筋を駆けのぼる。

「あー、圭子さん、ズルいつ。自分ばかり……」

「んふっ、はやいもによ、がひよ……んちゅっ、ちゅばっ、んんふっ……」

艶やかに赤い唇に自分のモノが吸い込まれている。それがちよつとキツイ印象すらあつた年上の美女の唇とくれば興奮しないわけがなかった。しかも知的で、経済力だつて間違いなく持つている、言ってみればセレブな女性が、自分に奉仕してくれている。男の征服感が女たちの愛撫でさらに刺激され、快感が増幅されていた。

「ご、ごめんっ。もう我慢できないっ。出すよっ……くううっ」

ビクンッ、ビクッ、ビクビク——！

温かく濡れた暗がりの中、ねっとりとした粘膜に包まれた亀頭粘膜が激しく痙攣する。ザラザラした舌にカリの根もとまでも舐めまわされ、唇でしごかれながら、竿や下腹部には二人の豊かな乳房が押しあてられ、あまりに甘美なマッサージが続いている。

ビュルッ、ビュルビュルッ、ビクビクビク——！



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!